

はなかった。政府主導で大きなインフラをつくり、電力、ガス、石油のネットワークはすべて経済産業省エネルギー庁が担当していて、良い意味での中央集権だった。だが、日本のどこで何が起こるかわからない時代である。エネルギーがないと人間は生きていけない。ならば、最低限生き伸びられるように、地元で「エネルギーの駅」を作ることが必要だと考える。燃料電池や充電器が学校や公民館など地域にあれば、基幹のインフラに何かが起こった時、自立運転ができる。エネルギーを備蓄しておけば、いざという時に必ず役立つだろう。

避難所はトイレがあるだけの場所が多かったが、テレビニュースが見られるエネルギー源だけでも自給できれば、避難所の状況は大きく変わるだろう。自分達の暮らしを守る、家族の命を守るために、地域エネルギーシステムの整備は今一番必要な事だと思う。

「新しい暮らし」や「新しい社会」を自分たちで生み出していかなければならない。前に戻るのではなく、別の道を見つけていかなければならない。3年-10年かけてでも、外国の良いところ、東北と同じように寒い北欧の人たちがどんな豊かな生

活環境をしているのかを視察し、何かを感じてみるのもいいと思う。東北の自分たちは自然が豊かな場所に住んでいて、バイオマスをはじめ多くの大事な資源が豊富にある。今あるインフラと結びつけて、「宮城版」「東北版」モデルを作ることは難易度が高いとも思う。目の前にそれだけ高い課題が待っていることを頭の中に入れておかなければならない。



個人

「自然と共に生きる農業」のこれから

名取市

三浦 隆弘 なとり農と自然の学校

取材日 2012.2.16

セリ、ミョウガタケなど在地野菜を作る農家の7代目。朝市夕市ネットワーク、NPO介在型市民農園「プチファーム」、公益財団法人みやぎ・環境とくらし・ネットワーク(MELON)、(特活)ほっぶの森びすたーリフードマーケットの農業就労支援などの活動に参画し、食と農のつながりづくりに取り組む。オープンファーム「なとり農と自然の学校」主宰。

3月11日 14時46分

3月11日は栗原市瀬峰にある農業試験場で、トマト栽培の研修を受けていた。栗原は震度7の揺れを記録した場所だ。平屋の1階にいたが、揺れがひどくガラスが割れた。50名程の参加者はすぐに駐車場に避難したが、立ってられずしゃがんだり、植えこみの木につかまっていた。池の水面もばちやばちと激しく揺れていた。

研修会は即座に終了、現地解散となった。

車載ラジオを聞き、ツイッターを見ると10mの津波警報が出ていた。とにかく家に帰ろうと、ラジオを聞きながら名取へ向かった。山方向を行けば良かったのだが、気が動転していて瀬峰から田



尻へ入った。田尻地区では道路や橋に段差ができていて走行しづらく、迂回しながら松島へ抜けた。松島では通りかかったホテルの付近で水がまさに溢れかけている状態だった。危険を感じ、そこから利府に向かう山道に抜けた。このあたりから道路は大渋滞を起こしていた。ブロック塀が崩れ、あるいは橋が崩れていたためだ。

ツイッターでは情報がどんどん書き込まれており、ラジオよりも有力な情報源となっていた。ただ、津波にのみ込まれてトラックの荷台の上にいるというチェーンツイートの書き込みもあった。岩切付近でいよいよ燃料が底をつきはじめ、知り合いの方に車を入れ替えさせていただいて、翌日朝に名取に着いた。この間、家族との連絡は一切とれずにいた。帰宅すると、家の中はしっちゃかめっちゃか。築200年の家の土壁が落ちていた。

ビニールハウスで暮らした1週間、7月には母子疎開へ

農家なのでビニールハウスがある。そこにストーブや布団を持ち込み、1週間程暮らしていた。オール電化と対極にいる生活をしていたので、石油ストーブや練炭火鉢がある。これらを使って煮焚きをしていた。水は井戸や備蓄していたペットボトルもあったが、名取市は水道水がいきっていたので問題なく過ごせた。

また、ライフラインを少しずつ独立化する意識は環境団体・MELONに関わっていたため常にあった。家全部はできないが、ソーラーパネルを1つ導入していたため夜には灯りがついたし、トラクター用のバッテリーとインバーターを直結させてテレビを見ることも、携帯電話の充電もできた。そういう意味では環境活動に関わり、いろいろなお話を聞いて「ないよりはあった方がいいかなあ」と思っていたものが役に立った。

2・3日が経過しても、多賀城の方にはずっと黒煙があがっていた。下増田小学校に避難所のようなものが立ち上がっているらしいと聞き、ちょうどセリの収穫時期だったのでセリを収穫してお米と一緒に持っていった。障害者の就労支援施設に関わっているが、この施設は長町に店を持っているため野菜などを運ぶ支援も行なった。店はだんだんと通常営業に戻っていったが、精神的にはまだ通常には戻れていない。

3月15日から20日にかけて、雪や雨が降った。これに浴びない方がいいというツイートが書き込まれていたのを見て、放射能への心配に気づいた。そこからネットで放射能に関する情報を集めて勉強し、最新情報をチェックし続けた。7月には母子疎開を選択し、相方の実家に子ども達を転校させた。とりあえずわからないから距離をおく判断

をしたわけだが、父親としてはそれで随分精神的に安定した。

下余田集落では、稲作は今年1年お休みになった。田んぼに水を入れると、その水は閑上（ゆりあげ）地区にたどり着く。閑上地区は大きな津波被害を受けた場所で、行方不明者の捜索が続いていた。稲作をすれば水がどんどん流れこみ閑上地区で水があふれ、捜索の邪魔になる。人道的措置として稲作の中止が決定された。

有機農家としての対応

「地域循環型農業」「顔が見える農業」を売りにしてきたが、堆肥の原料になる稲わらなどが放射能に汚染されていたら、堆肥の中に汚染が濃縮される可能性がある。基準値以下でも放射性物質が検出されたら、知らせずに売るわけにはいかない。5月にガイガーカウンターを購入し、畑の表面や雨どいを計測した。県南の農家さんが計測機関にサンプルを送って計ったところ、高い数値が出ていた。それをネットで確認していたので、計ってから販売することを決めた。セリは土と水、できたものを計っている。自分の中で数値を決め、これを下回ったら売ろうと考えていたが、結果的にはすべて大きく下回っていた。

ここで農家として暮らしていこうと思いつけるモチベーションは、「安心安全なものを作る私」がいて、「それを買い支える食文化を一緒に作って担おうとする皆さま」と、仙台ならではのつながりを作っていこうというものだった。「自分が食べたいと思えるものを作りたい」という思いが根っこにある。

一方で、自分自身の基準をクリアするのは非常に辛い現状が見えてきている。折り合いをつけるのではなく、それをいかに乗り越えて自分基準を満たせる食べ物を作り、作ったもので経済活動を行い、生活できるかを考えなければいけない。幸せなことには今までは小さな家族経営を続けることができたけれども、土や水の大循環の中で有機物をまわしながら小さな家族経営の有機農業に取り組み続けることは、想像しにくい状況になってきている。自然と共に生きる農業をやってきた人達が、対応を迫られている。

作る人と食べる人の関係性

作る人と食べる人が対立するのではなく、共に放射線量を計り続け、「目に見えた評価」を続ける関係が作れるかどうか今後の鍵になるだろう。これができなければ仙台で農家はできないと思っている。宮城では農産物の検査サンプル数が少なく、県産の農産物に対する消費者の信用は低下し

ている。計測を繰り返し、自分の畑でできた作物について農家自身がデータを持ち、数値を表示した上で流通・販売することは、消費者に安心して購入してもらうために必要な措置だ。これを宮城県農家全員の気持ちとして共有したい。

作付け前の今のうちにやらなければいけないことはたくさんある。田んぼが復旧して、国の支援をいただいたとしても、安心安全で宮城の食文化を担えるおいしい生産物が作れない土であれば、それは悲しいことだ。

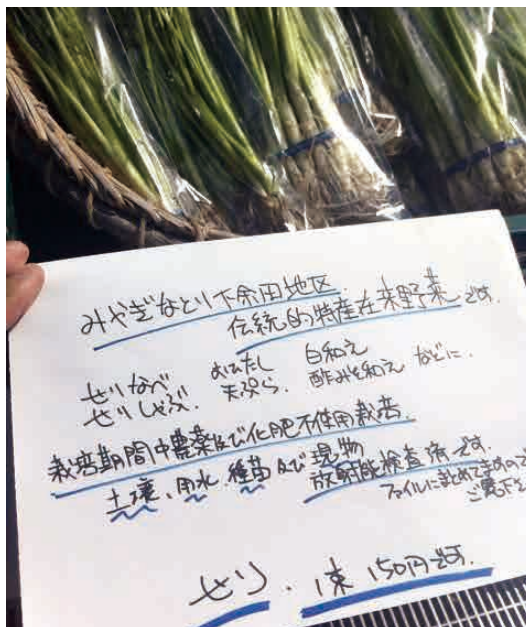
震災からこれまで想像力をたくましくさせて、ここで農家をしながら10年・20年子どもを養いながら生活し続けていくためにはどうしたらいいか、新たな情報を仕入れながらずっとシミュレーションをしている。

震災を振り返って

たくさんの方がすでに仰っているが、目をつぶって見ないでおいできたものが一気に出てきた。自分の力で、あるいは自分の連携でできる相手づくりの中で対応して、ひとつひとつ解決していかなければいけない、という覚悟がついた気がする。漫然と取り組んではいけない現実もある。現状としてはまったく対応は追いついていないし、認めたくない気持ちもある。大地と共につながる最前

線の農家として考えると、この大地を一番最初に諦めなければいけない、そういう判断をしなければいけないのが一次産業の人間だ。

田畑への執着があるし、安心安全な食べ物を生産することで、食べる人の健康づくりと笑顔に寄り添いたい。そのためにあらゆる試行錯誤を重ね、さまざまな方々と思いを共有していきたいと思っている。



個人

大震災を経て学んだのは、感謝の心。たくさんの方がつながって、私たちの暮らしが成り立っている。

仙台市

長田 賢一 武心學館 長田道場 師範

取材日 2012.2.23

個人

1980年代から90年代にかけて(社)全日本空道連盟 大道塾が主催する北斗旗全日本空道選手権大会を幾度も制し、現在は大道塾仙台西支部の支部長を務める。独自道場を開いてからの10年で、延べ800人の門下生を指導してきた。道場生の情操教育や道徳教育の一環として環境活動に取り組み、仙台七夕祭りのごみ分別活動に参加するなど地域環境活動に力を入れている。

3月11日 14時46分

たまたま両親が来ていて、帰ろうと外に出た時に地震が来た。とっさに母を抱え込んだが、ものすごい揺れであったのでこれは建物が倒れると思った。母はだいたい怖がっていたので、一緒にいることができ幸いだったと思う。実家は岩沼にあり、もし別々にいたら連絡もとれず安否がわからないまま過ごすことになっただろう。

揺れがおさまると、ケガもなく一緒にいた安心感もあり、両親は「宮城県沖地震終わったね、あと

20年はこないな」と呑気なことを言いながら岩沼へと帰って行った。

道場の事務所の中は全てのもが落ちてごちゃごちゃになっていた。家の中も同様で、住めない状態だった。夕方に講演の予定が入っていたが、停電になっていたのでこれは中止だろうと判断し、1人黙々と片づけをしていた。夜になって郡山にいる妹夫婦と連絡がとれた。私としてはここがすごく揺れたと思っていたので、両親に怖い思いをさせてしまった、仙台で一番揺れたんじゃないかと話したら、「何言ってるの、大変なことになっ